

北星学園大学文学部北星論集第53巻第1号（通巻第62号）（2015年9月）・抜刷

【翻 訳】

養 蜂 家

山 本 範 子（翻訳）

王 晋 康（原著）

翻 訳

養 蜂 家

山 本 範 子 (翻訳)・王 晋 康 (原著)

[要旨]

中国SFの大家、王晋康氏の初期SF短編の翻訳である。

天才科学者の謎の死は他殺なのか自殺なのか。調査員たちがたどりついた真実は、一般人には理解できぬ、想像をはるかに超えた結末であった。

エドモンド・ハミルトンの『フェッセンデンの宇宙』を彷彿とさせる佳品である。

王晋康氏は1948年生まれ、1993年よりSF小説を書きはじめ、本作は1999年9月に雑誌《科幻世界》にて発表された。のちに《人民文学》海外版2013年春季号で英訳された。王晋康氏の作品はSFとミステリ要素が絡み合ったものが多く、近年ではミステリ要素の濃い長編を次々と精力的に発表している。

副研究員の林達の死には多くの疑問が残されていた。警察は最初は自殺ではないと信じて捜査を開始したが、数ヶ月調査しても他殺であるという証拠はなく、結局は1冊の「未解決事件」ファイルの中におさめられただけであった。疑いを引き起こした重要な手がかりは彼(?)がパソコンのスクリーンに残した1行の言葉であった。(彼は単身者用マンションのパソコン椅子の上で大量の睡眠剤を服用していた)、しかしこの文の意味ははっきりせず難解であった。

養蜂家の論旨。蜜蜂を呼び覚ましてはいけない。

多くの人間がこの言葉が何も説明できていないと考えたし、それは単にスクリーンに打ち込まれたものであって、「筆跡鑑定」の問題も存在しなかった。そしてほかの人間が打ち込んだ可能性もあり、ひょっとしたらネットから伝わってきたものかもしれない。けれども懐疑派はこれを自分たちの推理の根拠とした。この字を打ち込んだ時刻は記録では13日の午前3時15分で、法医学者は彼の死に至った時間をだいたい13日午前3時半から4時半と確定している。時間的にぴったりあう。このような夜更けに、善良な人間がここまでやってきて1行書き込むはずがない。警察はキーボードの上の指紋を調べたが、林達と彼の恋人蘇小姐のものしか見つけられな

かった。しかしのちに、蘇小姐はその場にいなかったという鉄壁のアリバイが判明した。その夜、彼女は別の男性の部屋にずっといたのである。

そうなると二つの可能性しかなかった。この難解な意味の言葉は林達自身が打ち込んでいったもので、おそらくは誰かもしくは警察のために警告を残したのであろう。或いは、誰かほかの人間が打ち込んだが、その人物は決してゲーム気分ではなく、何かしら特別な動機を抱いていたにちがいない。どちらの可能性であっても、「他殺」という結論を支持しているように思えた。

調査員が最初に訪れたのは、科学院の公孫教授であった。というのも彼はかつて林達の博士課程の指導教授で、林達の死後、同僚たちに「林達は自殺した」という推測に触れ回っていたからである。調査員は、自分と観点が食い違う相手に対する時、先入観という病に陥ってしまうのを避けるために、比較的慎重に調査しなければならないと思った。もちろんこれは理由の一つでしかなかったが、口に出しやすい理由でもあった。実際には……人々はみな警察の第一の原則を知っていた。すなわち、通報者が犯人である可能性は最初に排除しなければならない、ということ。

公孫教授の家は美しく、彼は白いルームウェアを身にまとい、頭は真っ白で、眉目はさわやかであった。林達の死に対しても残念だと繰り返し、林達は彼が最も眼にかけていた人物で、敏感な熱血青年であったと話した。林達は最も優秀な科学者とまでは言えなかった（というのもまだ若すぎた）が、最も優秀な科学者たるべき頭脳を持ち、何十年かに1人出会う天才で、彼の死は科学界にとって大いなる不幸であった。彼の説明はかなり抽象的だったが、林達の研究領域は、パソコンの知力と「窩石」の研究ということであった。林達の研究はもちろん人類にとっても非常に重要だったが、長い意義から見れば、近い将

来のものでもなければ軍事上の貢献もなかった。「国家に敵対したものではなかったから、研究のせいで殺されるはずはない」

彼はずっと沈痛な面持ちで話しつづけたが、やはり「林達は自殺にちがいない」と言い切った。なぜなら天才とは往々にして脆弱で、彼らは凡人と比べて宇宙や人生の本質を見通すことができる、故によく心理的な均衡を失うに至るのだ、と。その後、彼は自殺した多くの天才科学者たちの名前をすらすらと列挙した。それらの名前はどれもややこしくて、調査員は書き記すことができなかった（ただし録音はできた）。唯一覚えることができたのは、アメリカの核爆弾の父・フェルミの友人だけであった。数学用表上のすべてのデータを瞬時に暗算することができたため、その男は数学用表を用いずに計算した（そのころはまだ計算機は存在しなかった）という。（この話は細部まで調査員に深い印象を与えた）。だがその男は30歳あまりで精神が崩壊して自殺してしまった。

公孫教授は「卑俗な例を一つあげてみましょう」とつづけた。「あなた方は男です、生まれついて女性を追い求め、子供を作り育てる。けれどもあなた方は決してそれらの根本を徹底的に究明しようとか、このような衝動がどこからくるのかを解き明かそうとはしません。しかし天才は生命の本質を見通すことができます。彼は性欲はホルモンから生じ、母性愛は黄体ホルモンからなることを知っています。愛情とは自身を引き継ぐための単なる『ゲノム』による罫でしかありません。天才の理知が強く肉体の本能に大きく勝ってしまった時、おそらくは精神の崩壊が起きるのでしょう」

調査員は教授が話し終えるまで礼儀正しく聞いてから、この話は林達の死が『男女関係に関わっている』と暗示しているのか尋ねた。非常に奇妙なことに、公孫教授はこの時、突然落ち着きを失い、煩わしそうに「申し訳な

い、まだ授業があつてね、失礼するよ」と答え、言い終わるやいなや立ち上がって客を送ろうとした。調査員は教授の粗暴で失礼な振る舞いにカッとせず、立ち去り際に注意深く尋ねた。それは先ほど聞いたパソコンの「窩石」とはいったいどのようなものか、ということであった。「きっとそれはとても難しいもので、我々にはまったく理解できないでしょう。ただ最も簡単な言葉でどのようなものか輪郭だけでもいいので説明していただきたいのです」

公孫教授は冷たく応じた。「次にしましょう。今度またわたしに時間があつたら」

次は林達の恋人蘇小姐の調査であった。彼女はかなり美人で、セクシーといってもよかった。その日の天気はまだ肌寒かったにもかかわらず、彼女はへそをあらわにした、超ミニのスカートをはいており、白くむっちりした太ももが調査員の目の前で揺れていた。2人の調査員の彼女に対する評価は低く、彼女は間違いなく『分別のない』女性であると思われた。林達が死んですぐだというのに、彼女はもう話に花が咲き、悲しんでいるそぶりなどまったく見せなかった。それどころか、調査員の目の前で例の男友達と電話でお喋りしたほどである。

蘇小姐は非常に正直に、自分と林達は「深い関係にあった」と認めたが、彼があまりにも「本の虫でおもしろみがない」という理由で、とっくに彼とはバイバイするつもりだったと述べた。彼の社会的な地位は高かったし、収入も良かった、顔もハンサムといえた。ただこの一点だけがどうしようもなかったのだ。2人でデートした時も、彼は額にしわを寄せて心ここにあらず、彼の思いは光ケーブルのトンネルに入り込み、その狭くて長く、真っ暗な小道から抜け出すことはできなかった。彼はトンネルの突き当たりには光と電子でできたきらめく雲があり、神がその彩雲の中に漂っていると信じていた。林達は恋人に

夢中になっていた。彼女の高くそびえる乳房、整った長い四肢、まるまるとした臀部、そのほか全てに夢中になっていたが、神を追い求めている時だけはこの肉体的な魅力から離れるしかなかった。公孫教授の分析は完全に彼に合致していたわけではなかったが、事実彼はデートの時点でさえもぼんやりしていた。「私から見て、最近の彼の神経は正常ではなかったわ、絶対に自ら死を選んだのよ!」

林達の死に関して『精神異常』という見方が出された。これが出たのは2回目であり、調査員は彼女に具体例を挙げてくれと頼んだ。蘇小姐が答えた。「最近林達はシロアリや蟻、粘菌とかのことをしょっちゅう話していたわ。たとえば彼はいつも蜜蜂の『総合智力』について話していて、1匹の蜜蜂は1本の神経索が幾つかの神経節につながっているにすぎず、それはほとんど智力とはいえないけれど、彼らの種の群れが臨界数量に達しさえすれば、相互に密接に連携し、人類でさえ驚愕するような蜂の巣を建造することができるのだ、などと言っていたわ。彼らの六角形の蜂の巣は材料を節約する上で最適な角度の建造物で、数学的にもぴったりに精確だって。そういえば、近頃彼は近郊の養蜂家をよく訪ねていたわ……」

調査員はすぐさまパソコンのスクリーンに残された奇怪な書き置きを連想した。いうまでもなく、この養蜂家は間違いなくこの案件の鍵にちがいない。彼らは彼女にできるだけこの人物について思い出してもらった。蘇小姐は「私、本当によく知らないの、彼は1人でバイクに乗って行ったもの、そうね、だいたい3回くらいじゃないかしら、どれもその日のうちに戻ってきたわ、だから絶対に北京のそばの人だと思う。林達は戻ってきてからなんだかおかしくなって、興奮したり落ち込んだり、話があちこち飛んで『智力段階』だとかなんとか喋りつづけていた。私、覚えてないし、興味もないわ」と答えた。

調査員はもちろん事件が起こった夜の彼女の行動についても尋問したが、彼女がその場にいなかったと確信するにいたり、立ち去ろうとした。この時、蘇小姐は何気なく「そうそう、林達は私の家に上着を忘れていったわ、その中にたぶん養蜂家との写真があったんじゃないかしら」と口にした。この言葉を聞いて、調査員は大いに喜んだ。ポケットの中には一束の写真が入っていた。多くは蜂箱と蜂の群れを撮っていたが、中に1枚だけ養蜂家の写真があった。ちょうど蜜を採っているところで、蜂よけのネットをかぶっていて、顔はハッキリしなかった。しかし、蜂箱には貴重な情報があつた。上に紅漆で住所が書いていたのである。浙江寧海橋頭。

調査員がここにたどりつくまでずいぶん回り道をしたといえた。年配の刑事はよく同様の経験をしていた。簡単に探しだせると思った手がかりが突然ぷつりと切れ、万事休すとおもった瞬間に1本の糸口がたれてくるのだ。3日後、調査員は冀中平原にやってきて、その養蜂家のテントの中に座っていた。周囲は一面の菜の花で、きらきらと黄金色に輝いていた。この人物を探し出すのは非常に簡単だった。あちこち花を追う、こういった養蜂家たちは一般に自らは車を用いず、蜂箱を貨物トラックで輸送する。そこで、調査員たちはこの市の運送所で浙江寧海橋頭の張樹林が15日前に貨物伝票にサインしていたことを突き止め、追跡したのであつた。

しかし実際に会ってみるといささか失望させられた。少なくとも、中国映画で監督が選ぶ基準からすれば、この張樹林はどう見ても悪役ではなかった。彼は背が低くて太っており、顔は赤黒く、話し振りも生き生きとして、とてもさっぱりした清々しい人物だったのである。養蜂生活はとても孤独なのか、彼はこの2人の来客をととても親切にもてなし、自分の蜂蜜水を1缶ずつ押しつけるように振る舞った。テントの中は非常に質素だった。

さながら21世紀の中国版ジプシーといえた。ベッドにはまるまったままの毛布があり、鍋は三つの石ころの上にあり、ぼこぼこになってさびたやかんには「農業学大寨」と赤字で記されてあつた。彼の唯一の連れは幼い息子であつたが、その子はとても内気らしく、調査員に挨拶しなさいと父親に言われると、身を翻して外に逃げてしまった。

養蜂家の記憶力はとても優れていて、20日前のことも、録画したかのようにはっきりと寸分違わず覚えていた。その写真を見るなり彼はそれが自分であると認め、何回も自分を訪ねてきた男は林という姓で、31、2歳、学者のようで、薄いブルーの上着と銀色のセーターを着て嘉陵製のバイクに乗ってきたが、ナンバーの後ろ3桁は248であつた、と答えた。「わしら2人はとても気があつて、そりゃあ楽しくおしゃべりしたもんで！」

何を話したのかと尋ねられて、張は蜜蜂の生活習慣を滔々と語りつづけた。調査員はこの短期養成教育のおかげで、立ち去る時には半ば蜜蜂の専門家になっていた。張は次のように言った。「蜜蜂は8の字に舞って蜜源を指示し、8の字の中軸方向は蜜源の太陽に対する角度を示している。蜜蜂の雄はとても哀れで、交配すると蜂の巣を追い出されて餓死してしまう。というのも蜂の群れでは『廃人』を養わないからだ。養蜂家は蜜を取りすぎてはいけない。さもないければ、冬に再び蜂箱に蜂蜜を加えても、蜂たちはそれが自分たちの採取した蜜ではないと分かり、働かなくなってしまう。蜂の群れが大きくなると、働き蜂は自動的に蜜蠟を用いて、蜂の巣の下に3、4個の新しい玉座を作る。この時に不思議なことが起きる。勤勉で温和な働き蜂が突然いらいらしだし、二度と女王蜂に餌を与えなくなり、群れの塊は彼女を取り巻いて、玉座で産卵させ、玉座で生まれた幼虫が新しい女王蜂になる。新しい王がもうすぐ生まれようとすると、ほぼ半分の働き蜂が古い女王蜂にし

たがって蜂箱を飛び去り、近くの樹上でグループを作る。この時に養蜂家は用意した箱に彼らを誘導する。そうでないと、彼らは飛び去って野生の蜂に戻ってしまう。新しい箱に入った蜜蜂はこの瞬間から完全に古巣を忘れ去る。何かの原因で新しい巣を見つけられなかったとしても、外で凍死したり餓死したりするほうを選び、古巣には絶対に戻らない。それはまるでやつらの記憶回路が古巣を離れた瞬間に断ち切られたかのようだ。その時の古巣はまさに大騒ぎで、新しい王が玉座に這い出た後に最初にすることは、ほかの玉座を見つけ出して噛み破ることである。働き蜂も王を助けて中の幼虫をかみ殺す。だが、たとえば2匹の王が同時に誕生した場合は、働き蜂たちは完全に中立の立場をとり、静かに2匹を取り囲んで決闘を見守る。そのうちの1匹が刺し殺されると、彼らは失敗者の死体を蜂箱の外に放り出す。」「こんなちっぽけな生き物にも智力があるんだって考えてみてください。巣分かれする時に誰が責任を持って数を数えると思いなさる？あんなに大きな数なんて絶対にちゃんと数えられない、あいつらは10本の指さえないんですぜ」

林達と養蜂家は肩を並べて赤い雲のような杏の花の中に立っていた。白い蜂箱の列は横一列に地面に並び、黄色と茶色の縞模様の小さな生き物が彼らの周囲を軽やかに飛び回っていた。それらは自分たちの社会、自分たちの数学と化学、自分たちの道徳、法律、信仰、自分たちの言語と社交儀礼を持っていた。1匹の孤独な蜂は一つの生命としては数えられず、自然界では決して生き延びることはできない。蜂の群れが一定の数量に到達すれば、一種の総体智力を生み出す。ゆえに、それらは『蜂の群れ』と呼ばれるのは適切な表現ではなく、それらを一つの『大蜜蜂』という生き物とよぶべきではないか、単体の蜜蜂はそれらの1個の細胞にしかすぎないのだ。智力はここにおいて生み出され突出し、総体は個

体の合計を上回るのである。

林達は養蜂家を礼拝し、蜂の群れに対して、これらのちっぽけな生き物が自分たちに宇宙の大いなる道を悟らせてくれるのだと呟いた。彼は真剣に、蜂の群れの『巣分かれ』の臨界数量がどれくらいなのか、張に尋ねた。しかし逆に精確な数値に意味はなく、ただおおまかにこの「スケール」を理解すればそれでよかった。養蜂している張でさえこれらの話ははっきり理解できていなかった。

調査員が「臨界数量」という言葉を耳にしたのは2回目だった。この言葉は聞いたところいささか神秘的であったが、同時にいささかの危険性を帯びているように思えた（彼らはどちらも核爆弾に臨界質量があるのを知っていた）。しかし、彼らがこの言葉について尋問しても、養蜂家からは何の答えも得られなかった。張は関係のない話ばかりをした。彼は自分がネットをつけている写真を指さし、これは林さんがわざわざ自分を撮影してくれたもので、林さんは家にこの写真を送ってくれると言ったが、送ってもらったかどうかはわからないと言った。「本来の蜜の収穫時期ではなかったが、彼が頑強にわしにネットをつけて演じてくれと言ったんだ。彼は、わしがネットをつけると頭に王冠をかぶっているようだと。わしは蜜蜂の神で、蜜蜂にとってキリストであると。この林さんってのは子供っぽいところがあるっていう、ただのくだらない話だよ」

調査員は非常に鋭敏で、このようなたわいない世間話からすぐに蘇小姐のいう『精神の異常』というのを連想したが、急いでその考えを振り払った。張はこの話をしたことを後悔していた。彼はほかの人に林さんの『短所』を漏らすつもりはなかったのだ。再三再四問いつめられて、ようやく張はしぶしぶ認めた。「そうだよ、林さんは確かにくだらない話をしていた。彼はこう言ったんだ。張さん、あなたは蜜蜂の生活に『干渉』している、あな

たは彼らを連れてあらゆる蜜源を探し求めている、あなたは彼らの大部分の労働成果を人類に提供している、あなたは彼らを分群し繁殖させている、などとね。しかし蜜蜂たちはこのような『神の干渉』を察知できるのではないだろうか。もちろんこれは彼らの智力範囲を超えてはいるが、彼らがそのような『感覚』を少しでも持っていると感じる形跡はないのだろうか。たとえば、彼らは野生の蜂と比べて自由が足りないとは思わないのか。或いは、養蜂家は冬には足りない蜂蜜を蜂の群れに補充するが、彼らはその時に慈しみ深き『神の手』を意識するのだろうか。彼らが外からきた蜂蜜を受け入れないのは、ある種の子供っぽい意地なのではないだろうか」「林さんはわしを大笑いさせた。わしは奴らが賢いとはいえしょせんは虫で、どうしてそんなことが分かるか、と言った。わしが見る限り、奴らはとても満足して生活している。だが」と彼はまじめに弁解した「林さんは本当に脳みそには問題なかったんだ、彼は蜂を愛しすぎて、くだらないことで頭を悩ませてしまっただけなんだ」

調査員は彼の話聞いてがっかりした。この意外なところから得た手がかりも切れてしまった。彼らはそれまで一番疑っていたのは『養蜂家』だった。しかし今、どれほど疑おうとも、このさっぱりした気のいい張樹林は絶対に陰謀にかかわってはいなかった。2人は別れ際に、張に林氏の不幸を教えた。養蜂家は驚いたあと、滂沱の涙を流し、声をからして「善人は長生きしない、善人は短命だ」とむせび泣いた。

調査員は北京大学附属中学にも赴いた。林達の最後の社会活動はここに来て学生たちに講演することだったからである。当時接待を担当した教務室の陳主任は困惑して言った。「今回の講演は林達が自分から学校に連絡してきたものなんです。お金も受け取りませんでした。このような自薦は本校では初めての

ことで、林達のこともよく知りませんでしたから、最初は婉曲に断りました。けれども中国科学院の身分証明書を見て、すぐにどうぞと言いました」講演の実際の効果については、陳主任は冗談を言った。「何とも言えませんね。どちらにせよ、今学期の期末テストの成績は上がらないでしょう」

調査員は無作為に5人の、講演を聴いた学生を呼び出した。男子学生2人、女子学生3人で、彼らはきまじめに教務所の木製椅子に座っていた。学校は夜の自習時間で、教室は静まりかえており、窓の外では雪明かりがきらめき、色とりどりのネオンサインが遠くの夜空まで輝かせていた。学生たちの答えはばらばらで、林先生の講演は素晴らしかったという者もいれば、あまり印象に残らなかったという者もいた。ただ、眼鏡をかけた1人の女子学生だけがほかとは異なった答えをした。

「深い、彼の講演は非常に深いものでした」彼女は真剣な表情だった。「でも決して新しいものではありませんでした。大体において彼はこの頃流行している一種の哲学的観点を述べたにすぎません。それはつまり総体論というものです。私はちょうど総体論に関する1, 2冊の英文の原書を読んだことがありました」

この少女はやせっぽちで小柄、尖った下あご、大きな目、なで肩で、顔にはまだ幼さが残っており、年齢はもとより身長もほかの生徒より頭一つ低かった。陳主任が小声で説明した。「彼女の外見から判断してはいけません、この子は市でも有名な天才少女で、すでに2学年飛び級し、成績はいつも飛び抜けていて、英語のレベルも非常に素晴らしいんです」調査員はほかの学生たちに教室へ戻るよう告げた。彼らは、この少女1人と話したほうが効果があると考えたのだ。

予想通り、少女はきまじめさの仮面を脱ぎ捨て、両目をきらきらさせながら、思い出を

語った。「何が総体論だろうか？ 林先生は例を挙げて説明したの。1匹の蜜蜂の智力のレベルには限りがある、蜂の群れでの複雑な道德法則、複雑な習慣、複雑な建築予想図、そういったようなものは、すべてが1匹の蜜蜂の脳の中には存在していない。しかし1千万匹の蜜蜂が集まって蜂の群れを形成すれば、これらのものは自然に生み出される。どうしてこのようなことが？ 分からない。人類はこのような突発的な外部の予兆を見守ることしかできず、予兆の深層メカニズムについては何も分かっていない。たとえば、人間の脳は140億のニューロンによって構成されているが、ニューロン単体の構造と効能はとても単純だ。なのに外からの刺激に基づいてある種の衝動を生み出す。そのどれがニューロンの代表である『私』なのだろうか？ すべて代表たる存在ではない、十分なニューロンさえあれば、一定の時空的序列組み合わせでもって、はじめて『窩石』を生み出すことができる……」

調査員はまたしても『窩石』という言葉に耳にしたので、慌てて手を左右に振り、笑みを浮かべて彼女の話を見守らせた。「お嬢さん、おたずねしますがね、窩石とは何ですか？

我々の調査においてもこの言葉を聞いたことがあるんですよ、腎臓結石とかのたぐいではありませんよね、でも脳にそういう結石ができるとは聞いたことがないんです」

少女は横目で彼らの顔をじっと見ていたが、その瞳には笑い出しそうな光が飛び跳ねていた。彼女はこらえきれずに忍び笑いを漏らすと、辛抱強く答えた。「『窩石』じゃなくて、『我識』よ。(注：中国語では発音が同じ)

『我識』というのはつまり『我的意識』、独立した自然の『我』を意識することなの。人類の赤ん坊は1歳になるまでに『我識』を生み出すけれど、パソコンにはできない。たとえばカスパロフに勝利した『ディープ・ブルー』であっても、『我』というものは作れなかつ

た」「これはデジタルパソコンのことだけど、光コンピュータから量子パソコン、生体パソコン(生命体とパソコンの融合物)といったたぐいはアナログ式パソコンが世に問われて以来、状況は大きく変化したの。林先生は講演で『標準人脳(スタンダード・ヒューマンブレイン)』と『臨界数量』を挙げていたわ……」

調査員は顔を見合わせて苦笑した。この少女ときたら宇宙人の言葉で話しているかのようだ！ 彼らはもう一度彼女の話を見守らせ、『標準人脳』とは何か解説してくれと尋ねた。というのも、この言葉に殺人と関係あるような響きを感じとったからである。少女は簡単に説明した。「これは単なる度量単位の一つにすぎなくて、天文学的距離の度量には光年、秒差などの天文単位を使用するのと同じことなの。過去に、デジタルパソコンの能力は正確な媒介変数によって、貯蔵量(ビット)や演算速度(回/毎秒)などで描写されたわ。アナログ式パソコンのような方法はもはや適応してなくて、新しい近代的な人脳の標準智力で参照できる単位を提案している人もいる。このような計算方法は、まだ厳格化されていなくて、たとえば世界のパソコンネットワークの総容量に対する計算は、100億の標準人脳もしくは1,000億の標準人脳になると推算している人もいて、それぞれ大きくかけ離れてしまっているのよ」「でも林先生は非常に明晰な観点を持っていて、彼が言うには、正確な数値には意味がない、幾つであっても、結局は目の前のネット容量は臨界数量をとうに超えており、智力の急上昇を誘発したために、急成長したパソコンの智力はもはや我々の理解できる段階ではない……と」

調査員は非常に礼儀正しく彼女の話を見守り、彼女の協力に感謝を述べ、二度と勉強時間の邪魔はしませんよ、さようならと告げた。それから苦笑いしながら学校を離れた。

彼らはさらに死者の祖父母を訪問した(林達の両親は地元にはいなかった)。訪問した順番では、彼らは3番目になっていたが、調査報告書の記載では最後になっていた。それはおそらくは暗に、報告者が林達の祖父による死因分析を受け入れて賛成していることを示していた。その日彼らが林老人の家にやってきた時、客間はすでに人でいっぱいになっていた。すべて60歳以上の老婦人で、頭には白いハンカチを巻いており、四六時中敬虔な様子で熱心にぶつぶつと呟いていた。林老人は急いで2人を自分の書斎に招き入れ、いささか言いにくそうに説明した。いわく、あれはすべて妻のキリスト教仲間、彼女たちは死者のために祈っているのです、と。彼は、彼と妻がロンドンに留学した際にキリスト教に帰依したが帰国後は信仰を改めていた、退職後に妻は若かりし頃の信仰を再開したのだ、と続けた。「人にはそれぞれ志があり、私は彼女を引き留めませんでした。精神上頼るところがあるのは悪いことではないと考えています。残念ながら妻は、精神の浄化を追求するのではなく、キリストとその奇跡を頑迷に信じる凡俗化した、おばあさんたちによる『低次元』な信仰に接してしまいました。正直言うと、私は自分の妻がああいうおばあさんたちと一緒に何かするなんて思ってもみませんでしたよ」

彼は孫の不幸についてとても心を痛めていた。なぜならば、彼は孫が天才で、ずっと『天耳』というコードネームで呼ばれる巨大システムを構築しているところで、スーパー智力を探し、異なった智力レベル間の交流の可能性を探っていたと知っていたからであった。林達の死因については、「間違いなく自殺です、この点は疑いようありません。あなたたちは無駄な労力を費やしてはなりません」と述べた。林達は死ぬ前に1度電話をよこしてきたが、その時に彼は唐突に宗教や信仰の問題について話したのだという。「残念なこ

とに私たちは彼の感情に隠されたものを読み取ることができませんでした。本当に後悔しています」

林老人は続けた。この2年ほど、彼の妻はずっと孫に宗教や信仰を教えようとし、いつも彼に印刷されたちやちや小冊子を押しつけていた。けれども彼女の努力はいっこうに成果を上げず、見たところ、孫は礼儀として祖母に反駁していないだけであった。ただその奇妙な電話の中では林達は急に、三つの信仰を樹立した、と宣言した。1、神は存在する。2、神は善意で人類の進化過程に干渉したが、この干渉した形跡をあらわにはしていない。3、人類の分散型智力は永遠に神の高次元での思考を理解することはできない、と。「私はなぜ彼が突然宗教的な悟りを獲得したのか分かりませんでしたし、どうして彼がそれを祖母ではなく、私に話したのかも分かりませんでした」林老人はゆっくりと頭を横に振り、苦渋の表情で言った。「私は彼の信仰には賛成しませんが、三つの観点だけは受け入れることができます。実際に西洋国家で拡大する現代宗教観とぴったり一致していますから。でも孫のあの時の精神状態はおかしくて、とても焦っているような、とても苦悩しているかのような、そんな感じでした。彼は電話先で荒々しく次のように言いました。『僕が神の存在をはっきりと認めたからこそ、このくそいまいましい神のやつに我慢がならないんだ。はるか天にある一対の眼がじっと、僕の食べたり飲んだり排泄したり眠ったりするのを眺めているかと思うと我慢できない。僕らが猿の食行動や性行為を観察しているかのようだ。もっと耐えられないのは、僕らが智力をつくして科学的な探索を行っていることは、やつにとってネズミが迷路に穴をあける行為にすぎず、低レベルの智力が衰れにも盲目的にぶつかっているのと同じなんだってことさ。こんな人生になんの意味があるだろう!』私と妻はもちろん彼を精一杯慰めまし

たが、彼の心の底に流れる暗い部分には気がつかなかったのです。本当に後悔しています」林老人は真っ白な頭を揺らし、深い悲しみをこめて同じ言葉を繰り返した。

調査員は不思議に思って尋ねた。「彼は本当にただ天に対する変わった考えのためだけに自殺したのですか？」林老人が答えた。「そうにちがいません、私たちは彼の性格をよく知っています」林老人は自嘲するように苦笑した。「これはまさに林一族の家風でして、私たちの精神に対する要求はしばしば世俗生活の要求を超えることがあるのです。残念なことに私はことを見誤り一步後れ、彼を心変わりさせることができませんでした」調査員は彼に別れを告げて階段を下りた。彼の妻が戸口で十数人のキリスト教仲間と名残を惜しんでいるのが見えた。信者たちが厳かに彼女に告げた。「神は私たちの祈りを聞いておられます。きっとです、達ぼうやはきっと天国にいけるでしょう」2人が首をひねって林老人を見ると、彼は頭を軽くゆらゆらさせていたが、その瞳にはたとえようもない悲しみが浮かんでいた。

その土曜日の夜、眼鏡をかけた少女は宿題を終え、待ちきれないようにパソコンのスクリーンの前で腹ばいになった。それは両親が彼女のために購入したばかりの光コンピュータで、1本のLANケーブルが彼女をネットへと、無限へと、果てしない世界へと誘った。光ケーブルは1本の長くて狭い、真っ暗なトンネルのようで、彼女は永遠にそれを通り抜けることはできないし、永遠にトンネルの後ろに広がる広大無辺な世界を見つけることもできない。彼女がスクリーン上で見るのは、『ネット』が彼女に開放したいと思うものだけ、自分の智力で理解できるものだけではない。偶然にトンネルの中に閃光が現れるのを期待して、彼女もやはり夢中になって探索していた。林達は壇上でじっと彼女を見つめ、ほかの若い聴衆たち一人一人をじっと

見つめた。彼のまなざしは憂鬱そうで落ち着いていた。この時誰も死に神が彼のもとを訪れるとは知らなかった。その後ももしかしたら誰も彼の講演の動機を理解しなかったかもしれない。林達は『群論』を創立したあの若い数学者を思い起こした。彼は決闘前夜に夜通し眠れず、急いで群論の要点を書きつけたのだ——その時世界には誰もそれを理解できる者はいなかった。今にいたって、その貴重な草稿で、彼の死の直前における焦燥に触れることができる。草稿の空白部分には乱雑な字でこう書かれていた。

もう間に合わない、時間切れだ。

林達は言った。蜜蜂はとくに高等文明へと進化する三つの条件を備えている、群居生活、労働と言語(形体言語)。人類と比べると、彼らはもう一つ有利な条件を持っている、それは時間だ。少なくとも6千万年前には、彼らはすでに効果的な蜜蜂社会へと進化していた。だが蜜蜂の進化はとうの昔に終わっていた。それも(人類の文明と比較すると)とても低い段階でとまっている。なぜ？ 生物学者は、原因は一つ、彼らの脳の容量が小さすぎて、高等智力へと発展する物質の基礎がなかったからだと言う。この言葉を借りれば、我々も自分の1400グラムの脳を本当に喜んでいいものなのだろうか。——しかし子供たちよ、あなたたちは考えたこともないだろう、1400グラムの脳にも極限があるのではないだろうか？ 人類の智力もあるレベルで終結してしまうのではないだろうか？

誰も女子学生に林達の遺言を伝えなかった。

蜜蜂を呼びさましてはいけない。

しかし、たとえそれが伝わったとしても、彼女にもまた理解できなかっただろう。

その若さゆえに。

*この翻訳は王晋康氏からご提供いただいた電子データを基とした。

*2012年に発行された『类人』(四川出版社, 四川科学技术出版社)は, 本作をベースに, さらに発展させた長篇SFである。「司馬林達の死」, 「放蜂人」といった章があり, 複数の人物からなる一つの大きな物語の一部分となっている。

〔謝辞〕

翻訳, 掲載を快くご承諾くださった作者の王晋康氏に感謝します。